

第3節 人口の社会的流動

〔I〕 通 勤 動 態

交通・通信等の発展により、生活の社会化が一層進展し、人々の日常行動圏が拡大されてきた。この傾向は特に1960年代の「高度成長」によって展開・激化され、1970年代にはいと停滞した。そこで、国勢調査では、1960年以降の調査から従業地・通学地集計を行い、就業あるいは通学に伴う日々の人口流動の状況を明らかにしている。本稿では、これら国勢調査の資料を中心に、中部広域市町村圏（以下単に広域圏と呼ぶ）の通勤による人口流動の実態を分析し、広域圏を構成する二市七町間の相互依存関係、及び広域圏に対する京阪神大都市圏からのインフレンスを解明することを目的とする。さらに余力があれば、広域圏中心都市（中核都市）とされる近江八幡市・八日市市の比較分析を試みたい。

1. 交通システム

広域圏の交通システムは基本的に南北中心のシステムであるといえる。これは、西に琵琶湖を東に鈴鹿山脈をかかえ、南北に広がる地理的構造がもたらすものである。南北に通じるのは、東海道本線、新幹線、国道8号、307号線、

名神高速道路（八日市インター）などがある。このため、京都・大阪・名古屋まで1時間程度であり、京阪神のベッドタウンとして注目されてきた。南北の開発に比して、東西のそれは遅れている。近江八幡市と八日市を結ぶ近江鉄道がわずかにあるだけで、二市七町を機能的に連結する道路の整備は果たされていない。このため、近江鉄道利用者、路線バス利用者は、この数年停滞・減少の傾向がうかがわれる。このため、増加する通勤者は、マイカー利用による移動が主になっている。

南北に走る国鉄東海道本線の定期乗客の推移をみると（表2-17）、昭和35年から40年までは

表2-17 一日の国鉄定期利用者の推移

駅 名	昭和35年	40年	45年	52年
近 江 八 幡	7,116人 (100)	167	153	167
能 登 川	2,399 (100)	160	157	169
安 土	1,413 (100)	147	130	155
野 洲	3,378 (100)	155	138	197
守 山	4,596 (100)	157	160	175
草 津	7,071 (100)	160	186	233
大 津	8,838 (100)	121	105	114

※ ①昭和40年以降は、昭和35年の実数を100とした指数。

②「国鉄運輸状況」（『滋賀統計書1976』）から算出。

大津市・安土町を除いて、150～160%の増加を示す。しかし40年から45年では、守山市と草津市を除いた市町は減少している。この現象は留意されねばならない。なぜなら一般に、当地域のように常住就業人口の増加（表2—4参照）は通勤人口の増大、国鉄利用者の増加と比例関係にあると推定されるからである。その後52年までの利用は全体的に増大しているが、とくに草津市と野洲町の増加が著しい。この国鉄利用通勤者の推移は以下の通勤先の分析の稿で考察を行いたい。

2. 昼間人口・夜間人口

日々くりかえされる人口移動（通勤・通学・買物・娯楽）を全体に把握することは難しい問題である。そこで、国勢調査では常住人口（夜間人口）に通勤・通学など目的・場所が定まっている移動のみを調整した人口を昼間人口と規定し、買物・娯楽など目的・日時・場所がその都度異なる移動は調査の対象とされていない。

表2—18は、広域圏各市町の夜間人口と昼間人口の推移を示す。滋賀県の昼夜間人口比は96.2（昭和40年）から95.5（昭和50年）とほとんど変化をしていないが、人口そのものは着実に伸びている。昼間人口が夜間人口を上まわる市町は、彦根市・長浜市・栗東町・水口町・甲

西町などであり、大津・草津・守山の三市はベッドタウンの傾向が近年著しく、夜間人口が昼間人口を上まわっている。広域圏においては、八日市市のみが昼間人口が夜間人口を上まわっている市である。近江八幡市（昼夜間人口比90.5）は、大津・草津同様、京阪神大都市のベッドタウンに組み込まれている。

昼夜間人口比の低い町は、安土町80.4、蒲生町81.6、永源寺町78.9である。日野町・竜王町・五個荘町・能登川町などは、近江八幡市の90.5には達しないものの、ほぼ同市に近い比率で推移している。次に昼夜間人口比の10年間の推移を分析してみると、ほぼ三つのグループに分けることが可能であろう。一つは、八日市市のみである（昼間人口が夜間人口を上まわっている）。二つ目のグループは近江八幡市・日野町・蒲生町・永源寺町である（10年間一貫して昼夜間人口比が低下している）。三つ目のグループは、五個荘町・竜王町・安土町・能登川町である（このグループは、昼夜間人口比が一定、もしくは一度昭和40年から45年にかけては下降したが、45年から50年にかけて再び上昇している）。

3. 流出・流入構造

既に触れたように、昼間人口は常住人口（夜

表2—18 常住人口・昼間人口

	昭和40年			昭和45年			昭和50年		
	常住人口	昼間人口	昼/夜	常住人口	昼間人口	昼/夜	常住人口	昼間人口	昼/夜
滋賀県	853,385	820,892	96.2	889,768	853,530	95.9	985,621	941,636	95.5
大津市	157,760	159,469	101.1	171,777	172,146	100.2	191,481	190,486	99.5
彦根市	74,549	77,739	104.3	78,753	8,987	105.4	85,066	88,613	104.2
長浜市	49,871	54,923	110.1	51,027	55,708	109.2	54,064	58,439	108.1
近江八幡市	44,320	41,556	93.8	43,832	40,245	91.8	51,537	46,621	90.5
八日市市	29,437	29,670	100.8	30,261	31,176	103.0	34,653	35,413	102.2
安土町	8,095	6,591	81.4	8,339	6,731	80.7	8,550	6,871	80.4
蒲生町	8,474	7,236	85.4	8,466	7,163	84.6	8,852	7,220	81.6
日野町	21,416	20,185	94.3	20,754	18,488	89.1	20,913	18,165	86.9
竜王町	8,729	7,495	85.9	8,569	7,281	84.0	9,301	8,097	87.1
永源寺町	7,730	7,008	90.7	7,183	6,013	83.7	6,853	5,409	78.9
五個荘町	8,927	8,141	91.2	8,602	7,632	88.7	9,002	8,072	89.7
能登川町	15,126	14,553	96.2	15,260	14,028	91.9	16,815	14,922	88.7
広域圏 (二市七町)	152,254	142,435	93.6	151,366	138,757	91.7	166,476	150,790	90.6

※ 昭和40・45・50年「国勢調査」から算出。

間人口)に通勤・通学による流入人口を加え、流出人口を減じて求めるがここでは通勤による流出流入だけをとりあげ分析する。

表 2-19 広域圏各市町の流出・流入人口(1975年)

	流出人口 (A)	流入人口 (B)	流出人口 比 B/A
近江八幡市	9,033人	3,960人	43.8%
八日市市	4,040	4,669	115.6
安土町	1,721	518	30.1
蒲生町	1,883	695	36.9
日野町	3,123	560	17.9
竜王町	1,570	859	54.7
永源寺町	1,308	162	12.4
五個荘町	1,641	1,043	63.6
能登川町	2,762	998	36.1
広域圏計	27,081	13,464	49.7

※「国勢調査」から算出。

15歳以上の就業者で自市町外の市町で従業地を得ている就業者を「流出人口」、他市町に常住して従業地を当市町に得ている就業者を「流入人口」と規定すると、通勤動態は「流出人口」の構造によって明らかにされる。広域圏の流出人口は27,081人、流入人口は13,464人で、その差は、流出超過13,617人である(表2-19)。流出に対する流入の比率を流出比率(B/A)であらわすと、八日市115.6と最高を示す。最も比率の低いのは永源寺町の12.4、次が日野町17.9、安土町30.1、となっている。

さらに、国勢調査の従業地集計を利用して、各市町の流出率、流入率、流動率、流動性増加指数を算定して広域圏の通勤動態を作図したものが図2-2、3である。

図 2-3 通勤流動率と流動性増加指数

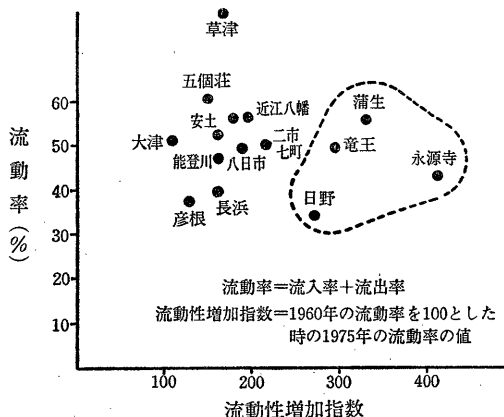


図 2-2 は、流出率を横に、流入率を縦にとった図であるが、A・B・Cの三グループに分けられる。Aグループは、流出率は高いが流入率は低いグループで近江八幡市、蒲生、能登川、安土、竜王、永源寺、日野の各町が属する。Bグループは、Aグループとは逆に、流入率が高く流出率は低いグループで広域圏では八日市市だけであるが、湖北の中核都市である彦根市、長浜市がこのグループの傾向に属する。Cグループは流出率、流入率ともに高いグループで五個荘町、大津、草津が属する。次に、図2-3で通時的要素を加えると、先のAグループの中で、永源寺、蒲生、竜王、日野の各町は1960年以降に流動化がすすんでいること、しかも流出増による流動化であることが理解される。同じAグループの中でも能登川、安土、近江八幡の市町は、すでに60年以前に流動化が生じていたといえよう。

次に流出入を地図上に描いてみると(図2-4、5)、60年以前に流動化が達成されていた近江八幡市、安土町、能登川町、五個荘町はその流出先(勤務地)は京都・大津への移動が主で、60年以降に流動化が展開された日野町、蒲生町、永源寺町の流出先は八日市市への移動が主であることがわかる。流入先(常住地)をみると、日野町、蒲生町、永源寺町、近江八幡市は八日市市からの流入が主であるし、能登川は彦根市、安土町・竜王町は近江八幡市からの流入が多いことが理解される。

図 2-2 流出率・流入率

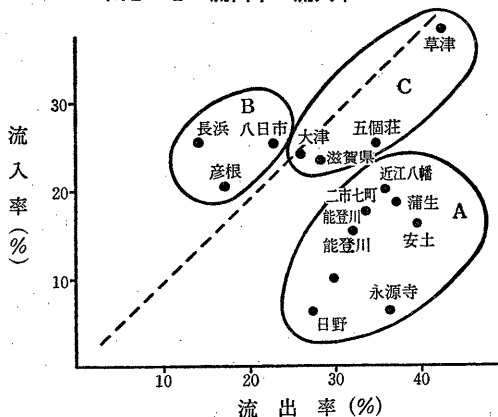


図 2-4 流出先(1975年) 流出人口計 2,031人

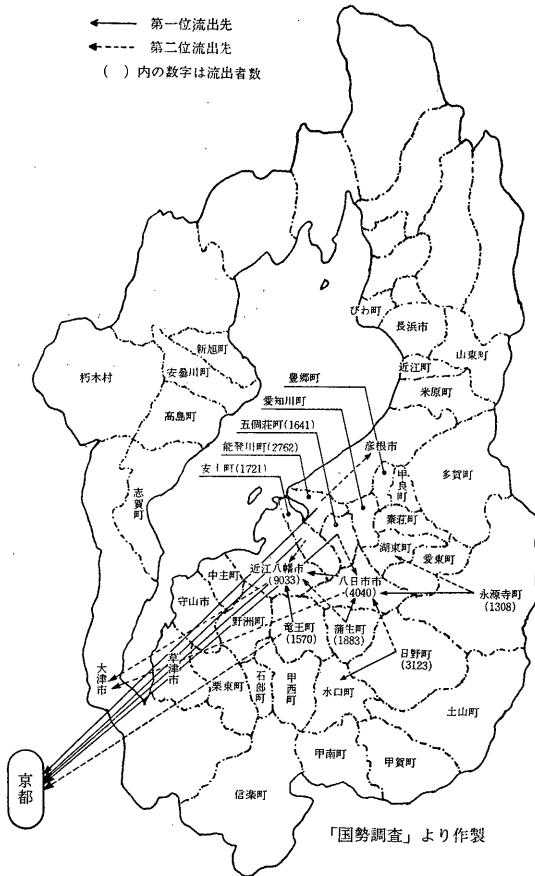
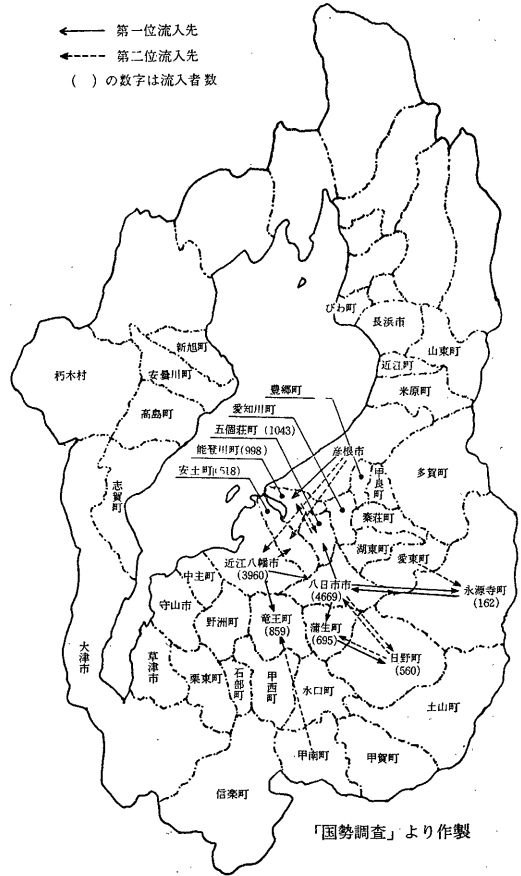


図 2-5 流入先(1975年) 流入人口計 13,464人



以上のことから、流出入構造では次のことが明らかになった。

- ① 1960年前後まで流動性が増加した市町は、八日市市を除いて、他は東海道本線にそった通勤移動を展開している。主要な通勤先は京都・大津方面である。
- ② 1960年前後から流動性が増加した永源寺、日野、蒲生は八日市市への通勤移動を進展させ、竜王町は近江八幡への通勤移動を進展させている。
- ③ 流出・流入先を総合的に分析すると、八日市市は周辺の町(永源寺・日野・蒲生)との相互依存関係を強めていることが理解される。(高橋伸一)

〔Ⅱ〕通学動態

1. 滋賀県の通学圏

滋賀県には、昭和52年現在、高等学校46校、

短期大学4校、大学2校、それに専門学校5校が設置されている。また、通学者の常住人口は59,496人であり、昼間人口は48,076人である(昭和50年国調)。

この節ではこれらの通学者の移動の範囲、つまり通学圏を、特に中部広域市町村圏を中心にみてみよう。そのばあい、通学圏を鈴木栄太郎のいう社会圏の一つである都市依存圏¹⁾として位置づけることにしたい。本節で使用する資料源が主として、『国勢調査報告』であるがゆえにそれからくる制約は免れ難い。すなわち、国調では通学者を15歳以上の者として十把一からげにあつてはいるので、通学者の学校種別を把握することは不可能である。しかしそのような制約があるにもかかわらず、各地域間の通学現象をみることは人口移動としての通学圏および通学完結率や通学依存率を知る上で意味がある。

まず滋賀県全体でみてみよう。滋賀県の高
学校以上の通学者の常住人口は59,496人である
(昭和50年国調)。その内、県内での通学者は
47,338人であり、他県への通学者は1,2158人
である(表2-20参照)。したがって、通学者の県
内完結率(常住地人口に対する県内通学者数の
割合)は約79.6%であり、他県依存率(常住地
人口に対する他県通学者数の割合)は約20.4%
である(参考; 全国平均の県内完結率91.7%,
他県依存率8.3%。総理府統計局統計局昭和52
年12月「インフォメーション」No.21, P.7)。

表2-20 滋賀県の通学者(人)

通 学 者 数			
常住地夜間人口	59,496	通学地昼間人口	48,076
自市町村で	25,723	自市町村で	25,723
他市町村へ	33,773	他市町村から	22,353
内(県内へ)	(21,615)	内(県内から)	(21,615)
数(他県へ)	(12,158)	数(他県から)	(738)

※ 昭和50年「国勢調査」から作成。

つぎに、県内での市町村の通学者をみてみよ
う。常住者の県内通学者47,338人のうち自市町
村内での通学者は25,723人であり、県内他市町
村への通学者は21,615人である。したがって、
自市町村完結率は約54.3%であり、県内他市町
村依存率は約45.7%である。つまり、滋賀県で
は通学者10人のうち約8人が県内に通学圏をも
ち、残りの2人の通学圏が他府県である。さら
に、県内での通学者8人のうち4.3人は自分の
住んでいる市町村が通学圏であり、残りの3.7
人は他市町村を通学圏にしている。

県下の学校の15歳以上の在籍者は48,076人
であるが、そのうち高等学校の生徒は35,249人
であり、さらにその中で約18,000人を占める県立
高等学校普通科の生徒は学区²⁾という限定地
域の範囲内が通学圏である。なお、滋賀県には
湖北学区、湖西学区、湖東学区、湖南学区の4
学区に加えて坂田調整通学区域(湖北学区の坂
田郡から湖東学区の彦根市へ通学可能)、西浅
井調整通学区域(湖北学区の西浅井町から湖西
学区の高島町へ通学可能)、志賀調整通学区(域
湖西学区の志賀町から湖南学区の大津市へ通学
可能)、多賀・甲良・豊郷調整通学区域(湖東

学区の多賀町・甲良町・豊郷町から湖北学区の
米原町への通学可能)、日野調整通学区域(湖
東学区の日野町から湖南学区の水口町への通学
可能)という5つの調整通学区域がある。

以上のような学区や通学者を十把一からげに
扱っているという制約があるが、つぎに中部広
域市町村圏を中心にした通学圏をみてみよう。

2. 中部広域市町村圏の通学圏

中部広域市町村圏内の2市7町における、昭
和40、45、50年の通学者の昼間人口と夜間人口と
の差を昼間人口比率(夜間人口100人当たりの
昼間人口)であらわしたのが表2-21である。

表2-21 圏域市町の昼間人口比率(通学者のみ)

	昭40	昭45	昭50
滋 賀 県	89.7	83.3	80.8
近 江 八 幡 市	106.1	104.3	108.4
八 日 市 市	106.7	105.2	98.7
安 土 町	21.3	15.2	21.7
蒲 生 町	27.7	16.3	15.3
日 野 町	101.3	88.6	85.7
竜 王 町	24.8	13.1	18.4
永 源 寺 町	29.4	21.2	17.5
五 個 荘 町	86.4	46.4	38.2
能 登 川 町	111.3	97.5	89.3
中 部 圏 平 均	88.7	79.6	79.1

※ 昭40・45・50年の「国勢調査」から作表。

表によれば、昭和50年現在、その比率は当該
市町の学校種別および規模によって、108.4か
ら15.3までの隔たりがある。また、同時にこの
表は当該市町の通学完結状況および依存状況を
示すものでもあり、安土町、蒲生町、竜王町、
永源寺町、五個荘町の5町の他市町への依存
状況がわかる。因みに、圏域内の各市町の通
学者の他市町への流出率は表2-22の通りであ
る。

反対に通学者の他市町からの流入率はつねの
(表2-23)通りである。

つぎに中部広域圏における通学圏をみてみよ
う(表2-24参照)。

表を一瞥して分かるように、常住人口9,956
人のうち、圏域内での通学者は6,210人であり、
圏域外への通学者は3,746人である。したがっ
て、この圏域の通学完結率は62.4%であり、圏

表 2—22 各市町の通学者の他県・市・町への流出

(実数と%)

常 住 地	昭 4 0			昭 4 5			昭 5 0		
		他市町へ 流 出	流出率		他市町へ 流 出	流出率		他市町へ 流 出	流出率
滋 賀 県	58,730	30,197	51.4	53,126	30,611	57.6	59,496	33,773	56.8
近 江 八 幡 市	3,211	1,484	46.2	2,830	1,564	55.3	3,019	1,657	54.9
八 日 市 市	2,080	1,091	52.5	1,765	1,094	62.0	1,989	1,193	60.0
安 土 町	583	460	78.9	559	484	86.6	595	486	81.7
蒲 生 町	564	409	72.5	509	426	83.7	522	443	84.9
日 野 町	1,473	300	20.4	1,185	390	32.9	1,294	432	33.4
竜 王 町	564	424	75.2	511	444	86.9	586	480	81.9
永 源 寺 町	398	281	70.6	373	297	79.6	366	302	82.5
五 個 荘 町	639	463	72.5	580	471	81.2	529	438	82.8
能 登 川 町	1,027	561	54.6	994	621	62.5	1,056	711	67.3
計 および 平均	10,539	5,473	51.9	9,306	5,791	62.2	9,956	6,142	61.7

※ 昭40・45・50年「国勢調査」から作表。

表 2—23 各市町の通学者の他県市町からの流入

(実数と%)

通 学 地	昭 4 0			昭 4 5			昭 5 0		
		他市町か ら 流 入	流入率		他市町か ら 流 入	流入率		他市町か ら 流 入	流入率
滋 賀 県	52,690	24,157	45.8	44,268	21,753	49.1	48,076	22,353	46.5
近 江 八 幡 市	3,407	1,680	49.3	2,952	1,686	57.1	3,275	1,912	58.4
八 日 市 市	2,219	1,230	55.4	1,856	1,185	63.8	1,964	1,168	59.5
安 土 町	124	1	0.8	85	10	11.8	129	20	15.5
蒲 生 町	156	1	0.6	83	—	—	80	1	1.25
日 野 町	1,495	319	21.3	1,050	255	24.3	1,109	247	22.3
竜 王 町	140	0	—	67	—	—	108	2	1.9
永 源 寺 町	117	0	—	79	3	3.8	64	10	15.6
五 個 荘 町	553	376	68.1	269	160	59.5	202	111	55.0
能 登 川 町	1,143	677	59.2	969	596	61.5	943	598	63.4
計 および 平均	9,353	4,284	45.8	7,410	3,895	52.6	7,873	4,069	51.7

※ 昭40・45・50年「国勢調査」から作表。

表 2—24 通学者の圏域内通学および圏域外通学

(実数と%)

	(A) 常 住 人 口	(B) 圏域内での通学	(A)－(B) 圏域外への通学			(B)/(A) 通学完結率	(A)－(B)/A 通学依存率
			1,343	県内 663	他県 680		
近 江 八 幡 市	3,019	1,676	596	316	280	55.5	44.5
八 日 市 市	1,989	1,393	295	169	126	70.0	30.0
安 土 町	595	300	121	90	31	50.4	49.6
蒲 生 町	522	401	241	170	71	76.8	23.2
日 野 町	1,294	1,053	276	180	96	81.4	18.6
竜 王 町	586	310	111	98	13	52.9	47.1
永 源 寺 町	366	255	241	135	106	69.7	30.3
五 個 荘 町	529	288	522	317	205	54.4	45.6
能 登 川 町	1,056	534				50.6	49.4
計 および 平均	9,956	6,210	3,746	2,138	1,608	平均 62.4	平均 37.6

※ 昭和50年「国勢調査」から作表。

域外への通学依存率は37.6%である。さらに圏
域外への通学者を県内と他県とに分けると、県

内への通学者は2,138人であり、他県への通学者
は1,608人である。したがって、それぞれの依存

表 2—25 近江八幡市へ通学する者の通学圏

(実数と%)

通学市区町村、 常 住 地	昭 和 40 年		昭 和 45 年		昭 和 50 年	
近江八幡市で通 学の者	3,407		2,952		3,274	
近江八幡市に 常住	1,727		1,266		1,362	
	流入者数	流入構成比	流入者数	流入構成比	流入者数	流入構成比
県内他市区町村 に常住	1,676	99.8	1,678	99.5	1,902	99.5
大津市	48	2.9	31	1.8	39	2.0
彦根市	62	3.7	233	13.8	255	13.3
長浜市	1	0.1	5	0.3	8	0.4
八日市市	303	18.0	285	16.9	350	18.3
草津市	89	5.3	39	2.3	32	1.7
守山市	守山町116	6.9	59	3.5	27	1.4
栗東町	42	2.5	17	1.0	18	0.9
中主町	13	0.8	32	1.9	20	1.0
野洲町	中主町34	2.0	44	2.6	51	2.7
石部町	88	5.2	7	0.4	5	0.3
甲西町	17	1.0	21	1.2	27	1.4
水口町	1	0.1	2	0.1	10	0.5
土山町					2	0.1
甲賀町			1	0.1	5	0.3
甲南町					3	0.2
安土町	100	6.0	120	7.1	123	6.4
蒲生町	69	4.1	74	4.4	114	6.0
日野町	24	1.4	68	4.0	73	3.8
竜王町	190	11.3	175	10.4	142	7.4
永源寺町	16	1.0	51	3.0	48	2.5
五個荘町	55	3.3	49	2.9	65	3.4
能登川町	106	6.3	95	5.6	138	7.2
愛東町	愛東村15	0.9	愛東村15	0.9	38	2.0
湖東町	28	1.7	31	1.8	43	2.2
秦荘町	40	2.4	46	2.7	51	2.7
愛知川町	22	1.3	54	3.2	63	3.3
豊郷町	稲枝町111	6.6	豊郷村21	1.2	36	1.9
甲良町	豊郷村19	1.1	47	2.8	35	1.8
多賀町	20	1.2	26	1.5	23	1.2
山東町	26	1.5	4	0.2	3	0.2
米原町	5	0.3	10	0.6	31	1.6
近江町	1	0.1	8	0.5	3	0.2
びわ町					1	0.1
その他の市町村	15	0.9	8	0.5	20	1.0
他 県	4	0.2	8	0.5	10	0.5
京都府	4	0.2	5	0.3	9	0.5
大阪府			2	0.1		
その他の県			兵庫県1	0.1	1	0.1
計	1,680	100.0	1,686	100.0	1,912	100.0

率をみてみると圏域外の県内通学依存率は21.5
%であり、他県通学依存率は16.8%である。

それでは具体的に近江八幡市および八日市市
を中心として通学圏（両市への流入状況）（表2

表 2—26 八日市市へ通学する者の通学圏 (実数と%)

通学市区町村 常 住 地	昭 和 40 年		昭 和 45 年		昭 和 50 年	
八日市市で通学 の者	2,219		1,856		1,964	
八日市市に 常住	989		671		796	
	流入者数	流入構成比	流入者数	流入構成比	流入者数	流入構成比
県内他市区町村 に常住	1,228	99.8	1,173	99.0	1,168	100.0
大 津 市				0.2	7	0.6
彦 根 市	13	1.1	49	4.1	26	2.2
長 浜 市						
近 江 八 幡 市	278	22.6	231	19.5	230	19.7
草 津 市			4	0.3	2	0.2
守 山 町	2	0.2			1	0.1
瀬 田 町						
栗 東 町			1	0.1	3	0.3
中 主 町						
野 洲 町	1	0.1	1	0.1		
甲 西 町					1	0.1
水 口 町	3	0.2	2	0.2	2	0.2
甲 賀 町						
甲 南 町			2	0.2		
安 土 町	50	4.1	53	4.5	38	3.3
蒲 生 町	90	7.3	70	5.9	84	7.2
日 野 町	102	8.3	112	9.5	113	9.7
竜 王 町	43	3.5	50	4.2	45	3.9
永 源 寺 町	110	8.9	115	9.7	111	9.5
五 個 荘 町	88	7.2	76	6.4	71	6.1
能 登 川 町	16	1.3	50	4.2	43	3.7
愛 東 町	101	8.2	77	6.5	84	7.2
湖 東 町	112	9.1	95	8.0	103	8.8
秦 荘 町	74	6.0	48	4.1	81	6.9
愛 知 川 町	42	3.4	45	3.8	43	3.7
豊 郷 町	33	2.7	23	1.9	33	2.8
甲 良 町	17	1.4	28	2.4	14	1.2
多 賀 町	32	2.6	37	3.1	32	2.7
米 原 町	18	1.5			1	0.1
その他の市町村	3	0.2	2	0.2		
他 県	2	0.2	12	1.0		
{ 京 都 府	1	0.1	2	0.2		
{ 大 阪 府	1	0.1	6	0.5		
{ 兵 庫 県			1	0.1		
{ その他の県			3	0.3		
計	1,230	100.0	1,185	100.0	1,168	100.0

※ 表 2—25,26とも昭40・45・50年「国勢調査」から作表。

表 2-27 近江八幡市への通学依存状況

(実数と%)

周辺市町名	当該市町常住在学通学者			近江八幡市への通学者			通 学 率 (%)		
	昭 4 0	昭 4 5	昭 5 0	昭40	昭45	昭50	昭 4 0	昭 4 5	昭 5 0
八 日 市 市	2,080	1,765	1,989	303	285	350	14.6	16.1	17.6
安 土 町	583	559	595	100	120	123	17.2	21.5	20.7
蒲 生 町	564	509	522	69	74	114	12.2	14.5	21.8
日 野 町	1,476	1,185	1,294	24	68	73	1.6	5.7	5.6
竜 王 町	564	511	586	190	175	142	33.7	34.2	24.2
永 源 寺 町	398	373	366	16	51	48	4.0	13.7	13.1
五 個 荘 町	639	580	529	55	49	65	8.6	8.4	12.3
能 登 川 町	1,027	994	1,056	106	95	138	10.3	9.6	13.1
計 および 平均	7,331	6,476	6,937	863	917	1,053	11.8	14.2	15.2

表 2-28 八日市市への通学依存状況

(実数と%)

周辺市町名	当該市町常住在学通学者			八日市市への通学者			通 学 率 (%)		
	昭 4 0	昭 4 5	昭 5 0	昭40	昭45	昭50	昭 4 0	昭 4 5	昭 5 0
近 江 八 幡 市	3,211	2,830	3,019	278	231	230	8.7	8.2	7.6
安 土 町	583	559	595	50	53	38	8.6	9.5	6.4
蒲 生 町	564	509	522	90	70	84	16.0	13.8	16.1
日 野 町	1,476	1,185	1,294	102	112	113	6.9	9.5	8.7
竜 王 町	564	511	586	43	50	45	7.6	9.8	7.7
永 源 寺 町	398	373	366	110	115	111	27.6	30.8	30.3
五 個 荘 町	639	580	529	88	76	71	13.8	13.1	13.4
能 登 川 町	1,027	994	1,056	16	50	43	1.6	5.0	4.1
計 および 平均	8,462	7,541	7,967	777	757	735	9.2	10.0	9.2

—25,26参照) をみてみよう。

表 2-25 からみれば、近江八幡市への流入者は八日市、彦根市、竜王町、能登川町、安土町、蒲生町に多い。また、表 2-26 からみれば、八日市市への流入者は近江八幡市、日野町、永源寺町、湖東町に多い。

つぎに、中部広域圏内の市町が近江八幡市および八日市市にどの程度通学しているかを表 2-25および表 2-26から作表すると表 2-27, 28のようである。

表 2-27, 28 からみれば、近江八幡市への通学依存率の高い市町は竜王町、蒲生町、安土町、八日市市などであり、八日市市への依存率の高い市町は永源町、蒲生町、五個荘町などである。

3. 総 括

上でみてきたことから、ここではつぎのようなことが指摘されるだろう。

- ① 県全体の常住人口(通学者) 59,496人のうち他県への通学者数は12,158人である。すなわち、通学者の他県依存率は約20.4%であり、全国平均の8.3%を大幅に上回っている。
- ② 中部広域市町村圏の常住人口(通学者) 9,956人のうち圏域外への通学者は3,736人、37.6%である。

表 2-29 近江八幡市と八日市市の比較
(通学者のみ)

項 目	近 江 八 幡 市	八 日 市 市
1. 夜 間 人 口	3,019	1,989
2. 昼 間 人 口	3,274	1,964
3. 昼間人口比率	108.4	98.7
4. 流出者数および率	1,657 (54.9%)	1,193 (60.0%)
5. 流入者数および率	1,912 (58.4%)	1,168 (59.5%)
6. 圏域内の他市町からの流入者数	1,053	735
7. 学校数および生徒数	4 (2,501+α)	2 (1,353)

- ③ 近江八幡市と八日市市を比較したばあい表
2—29のようである。(星 明)

〔註〕

- 1) 鈴木栄太郎, 1957, 『都市社会学原理』有斐閣,
pp. 122~3, pp. 305~9。
2) 昭和53年4月27日付, 朝日新聞に滋賀県教育委員
会に設けられた「高校教育研究協議会」(昭和48年
「高校教育改善委員会」として設立, 昭和50年「高
校教育研究協議会」と改称, 昭和52年3月解散)が
だした「8学区試案」に対する県民の賛否両論が紹
介されている。

8学区試案は現在の湖南学区と湖東学区をそれぞ
れ3つに分けるものである。この試案を受けた県教
委が市町村教委や高校長会, 中学校長会などの意見
をとりまとめたところ, 反応はいまひとつ良くなか
った, という。積極的な試案賛成は, かねてから
「瀬田川の橋を切り落とせ」と主張してきた大津市
ぐらい。湖南学区の他市町は反対意見で, 湖東学区

は「再編は湖南だけでやってくれ」との受け止め方
であった。

県立高校普通科通学区の現行と
8学区試案の対比表

学 区 現行試案	所属高校	所 属 地 域
湖南	1 膳所, 大津, 東大津, 石山, 堅田	大津市
	2 草津, 守山, 栗東, 草津東	草津市, 守山市, 栗太郡野洲郡
	3 水口, 水口東	甲賀郡
湖東	4 八幡, 能登川	近江八幡市, 神崎・蒲生両郡の西部(能登川, 安土, 五個荘, 竜王)
	5 八日市, 愛知, 日野	八日市市, 愛知郡, 神崎・蒲生両郡の東部(永源寺, 蒲生, 日野)
	6 彦根東, 彦根西	彦根市, 犬上郡
湖北	7 長浜, 長浜北, 米原, 虎姫, 伊香	長浜市, 坂田郡, 東浅井郡, 伊香郡
湖西	8 高島	高島郡, 滋賀郡